

## 2023年度 ロザリー・レナード・ミッチェル記念奨学金募集要項

本奨学金は、本学学部および大学院に在籍する学生で、ジェンダーに関わる活動・研究をした者(団体)、あるいは活動・研究を計画している者(団体)を幅広く対象とし、2000年度から募集を始めた奨学金です。

### (A) ジェンダーフォーラム論文賞

対象：学部学生・大学院生(個人・団体)	提出書類：①ジェンダーフォーラム論文賞申込書* ②論文(日本語2万字以内の未発表論文)
支給額：優秀：10万円、佳作：5万円	備考：執筆にあたってはジェンダーフォーラム「年報」投稿規定に従うこと。
採用件数：1~4件	
選考方法：論文審査	

書類提出期間：2023年10月1日(日)~2023年10月31日(火)まで  
 書類提出先：ジェンダーフォーラム事務局(gender@rikkyo.ac.jp)に添付ファイルで提出  
 採用発表：11月下旬(予定) 学生課奨学金掲示板(池袋/新座)、10号館掲示板、立教時間、フォーラムHPに掲載。発表日は追って知らせる  
 授与式：12月下旬(予定)

### 【ロザリー・レナード・ミッチェル記念奨学金(A)・(B)の申込書(願書)の利用目的】

標記の申込書(願書)で取得した個人情報は、奨学金採用者(団体)の選考および発表のために利用する。採用者(団体)の論文・報告書等は「年報」に掲載する。また、奨学金制度広報のため冊子、WEB等に採用者名を記載することがある。

以上に同意した上で、申込書(願書)を提出すること。その他、個人情報の取扱いについては、「プライバシーポリシー:立教大学における個人情報の取扱いについて」(https://www.rikkyo.ac.jp/privacypolicy/)に準じる。

※今年度の(B)活動・研究助成金の募集は終了しました。来年度は4月に募集予定です。  
 ※申込書、願書はホームページ上からダウンロードできます。(http://www.rikkyo.ac.jp/research/institute/gender/)  
 ※詳細や不明な点はジェンダーフォーラム事務局にお問い合わせください。  
 ジェンダーフォーラム事務局(池袋キャンパス6号館1階) Tel:03-3985-2307 E-mail:gender@rikkyo.ac.jp

## 2023年度ロザリー・レナード・ミッチェル記念奨学金B奨学生決定!

今年度の(B)活動・研究助成金には5件の応募があり、5月18日に実施された選考委員会において、2件に助成金を授与することを決定いたしました。選考結果は下記のとおりです。

### ロザリー・レナード・ミッチェル記念奨学金(B)活動・研究助成金選考結果

奨学生氏名(所属)	研究課題	支給額
田中 美咲子(文学研究科日本文学専攻博士課程前期課程2年)	「谷崎潤一郎の戦中・戦後作品における女性表象」	7万円
鈴木 紗和(文学部文学科文芸・思想専修4年)	「身体の性別化、そのプロセスの内部——セクシュアリティの「攪乱」から「優い去勢」へ」	5万円

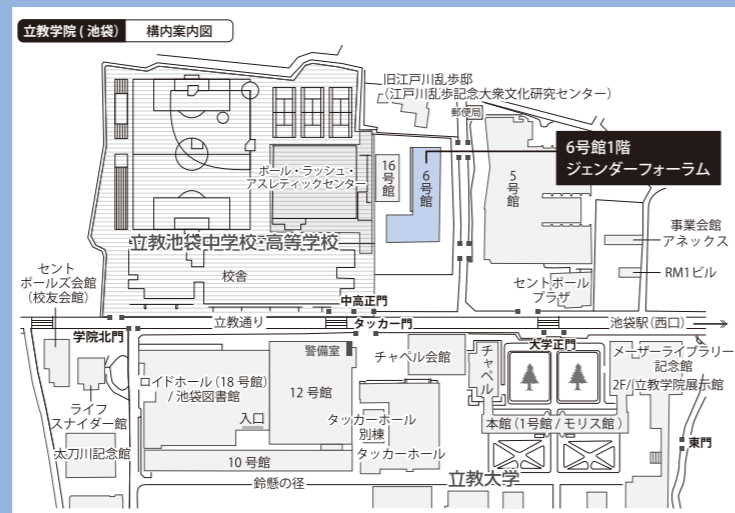
## 立教大学ジェンダーフォーラムのご案内

「常識」にとらわれず、性差やセクシュアリティ(性自認・性的指向など)についての問題を本音で語り合い、考える場、それがジェンダーフォーラムです。ジェンダー(gender)とは、社会や文化の「常識」にしたがってつくられた性差のこと。「女/男らしさ」「女/男役割」や異性愛を「あたりまえ」とする考え方もそのひとつです。「常識」「あたりまえ」とみなされている性をめぐる社会通念・制度・規範には、一人ひとりの個性的なあり方を抑圧するものが少なくありません。ジェンダーフォーラムは、女子学生寮ミッチェル館(1998年閉館)の精神を受け継ぎ、ジェンダーについての教育・研究拠点として1998年に誕生しました。ジェンダーに関する身近な違和感をもっている方から学識を深めたい方まで、様々な人に広く開かれています。より多くの人々が、自分自身の問題として社会生活における「ジェンダー」に気づき、理解し、考える契機となるよう、公開講演会やジェンダーセッション、コーヒアワーなどを開催しています。

開室日：毎週月曜日~金曜日  
 開室時間：10:00~16:00  
 ※新型コロナウイルス対策のため、一時的に開室日時を変更する可能性があります。詳しくはホームページをご確認ください。  
 場所：立教大学池袋キャンパス6号館1階  
 TEL：03-3985-2307  
 E-mail：gender@rikkyo.ac.jp  
 URL：http://www.rikkyo.ac.jp/research/institute/gender/



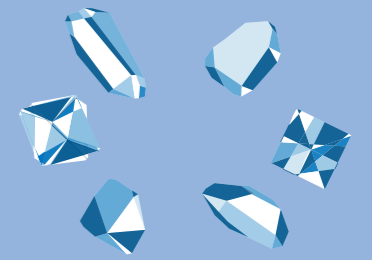
6号館1階奥から入口付近のスペースに移転しました!



# GEM

Vol.49 2023.10.01

Rikkyo Gender Forum News Letter



Gender Forum  
Rikkyo University



Gemとは…命名時には本フォーラムがその精神を受け継いでいる立教大学女子寮ミッチェル館(1998年閉館)の“M”にちなんだものでした(Gender Encountering in Mitchell)。現在はさらなる発展を企図して、ジェンダー平等の実現を目指すことを意味するGender Equality in the Makingとし、ニュースレター、メーリングリストの名前として使用しています。

### 第89回ジェンダーセッション(2023年7月27日(木))

## 「歴史と政治経済学の視点からみる「農嫁女問題」

登壇者：李亜姣氏(日本学術振興会外国人特別研究員(東京大学社会科学研究所))



高度成長は社会に光だけでなく、何かしらの影をもたらす——。現代中国は、急速な経済成長を遂げ、2010年に日本を抜いてGDP世界第2位の経済大国になった。その成長は「投資加熱症」とも言える土地・家屋など固定資本の急増によって実現し、過激な都市化をもたらした。この高度成長がもたらした影は何であったのか。

講師の李亜姣氏によると、かつての中国では、女性にも一人分の土地所有権が分配されていたという。しかし、1990年代以降の中国では、農村の女性のうち村外の男性と結婚した人は農村集団経済組織から排除され、土地の権利を収奪されるようになった。

「嫁に出した娘はこぼした水も同然」と言われて、数にカウントされない。これが「農嫁女問題」であり、現代中国の高度成長がもたらした影である。李氏は「農嫁女化」は家父長制的、性差別的イデオロギーに基づき、中国の市場化転換期における資本主義家父長制の現れの1つであり、さらに、現代中国で進行中の本源的蓄積の重要な側面だと指摘する。

土地を奪われた「農嫁女」の女性の一部は対抗運動を展開し、自らの権益を取り戻すべく裁判で異議申し立てをしている。しかし、裁判を起こすことに対して家族から反対を受けるなど、家父長制の下で女性が異議を唱えることは難しいという。また、対抗運動を率いる魅力的なリーダーは不在であり、対抗運動に取り組む全国レベルの女性同士のネットワークが生じても解体されてしまうなど、現状はかなり厳しいという。

ジェンダーセッションでは質疑応答の最後に、「どうやれば男女平等の思想を農村に普及させることができると思うか?」という参加者からの質問があった。李氏はその質問に対して、長年「農嫁女問題」を研究してきた立場から、また中国の都市部で「農嫁女問題」に取り組んでいる女性弁護士から聞いた話を踏まえても、解決策は見つからず皆一様に悲観的な考えを持っていると答えた。私はそのやりとりを聞いて、女性を差別し抑圧する資本主義家父長制の問題の根深さを改めて痛感させられた。

ところで、中国ではいま、日本のフェミニズムを牽引してきた社会学者上野千鶴子氏の著作がブームだという。李氏も、上野氏の著作「女たちのサバイバル作戦」を中国語に翻訳した。こうしたブームを受けて、中国におけるフェミニズムはこれからどのように展開していくのか。いまはエリート女性の間でブームが起きているというが、「農嫁女問題」への対抗運動と今後どこかで接続しうるのだろうか。その行方に関心を持った。

菅森朝子(ジェンダーフォーラム所員/本学社会学部助教)



## 春学期のコーヒーアワーに参加して

「これに参加しなきゃ!」

4月、私はコーヒーアワーのお便りを見て、すぐに参加を決めた。今思い返すと、その瞬間の自分の行動力に驚く。

2023年春学期、ジェンダーフォーラム主催のコーヒーアワーは4月、5月、6月の3回行われた。全てオンラインとのハイブリッド型ではあったが、学内参加の者も多く、6月に開催されたコーヒーアワーでは過半数が学内参加であった。

始まりは瞬発的な参加であったが、結果的に私は春学期に行われた会には全て学内参加した。学内参加の方とは直接会うことができ、オンライン参加の方とはマスクなしの表情を見ながら会話ができ、ハイブリッド型とはいえ顔を合わせて、ジェンダーに関して、またそれぞれのセクシュアリティに関して色々な方とお話ができるという素敵な会であったと感じている。

初めて4月の会に参加した後に覚えた高揚感は、初めてTOKYO RAINBOW PRIDEに参加した時と似ていた。それは「1人じゃない」という安心感と、「もっと学びたい」というワクワク感、「充実した時間だった」という証の気持ち良い疲労感が混ざったような感覚である。まだ決して安易に誰にでも話せるわけではない、ジェンダーやセクシュアリティという個人のプライベートに踏み込んだ話題を、安全が担保されている環境だからこそ初対面の方でもお話しできた。それは私には初めてのことでとても不思議で貴重な経験であった。内容は、日常生活のモヤモヤの共有やジェンダーに関する学問的な問い、社会の動きに関する情報共有や立教大学にある機関、授業の紹介など多岐に渡り、どの回も得られるものが本当に多く、とてもありがたい時間であった。同じような話題があっても同じような会話になったことは一度もなく、参加者が変わればその時々で話の進み方も意見も異なり、毎回違った発見があり本当に興味深かった。

参加を通して、4月、私が何かに突き動かされるように参加を決めたのは、コーヒーアワーが、私が求めていたコミュニティと大学での活動そのものであったからだと分かった。直接言葉を交わ

すことで知識も視野も圧倒的に広がることを実感した。昨今ジェンダー観などはプライベートでセンシティブな内容であるだけに話すことを恐れ避けてしまうことも多いように感じるが、一つ知識を得ることは一つ自分を自由にしてくれることだと私は思う。間違っても知らないこともきっと恐れることではないから、ぜひ気軽に多くの方に参加してもらいたい。また「コーヒーアワー」のような機会が増えていくことを私は望む。

数田有以子(本学社会学部社会学科1年)



## 立教に戻って——フォーラム事務局員着任にあたっての挨拶

「ジェンダー平等の実現は、人権と民主主義の体現」

4月に刊行した単著(写真)で私はそう強調した。ジェンダー平等とは、「男だから」「女だから」というのに拘らず、自分がこうしたいという生き方が選択できる権利であり、ジェンダー平等の推進とは、その権利が保障・担保されるために、ここがおかしい、こう変えるべきという当事者の声が社会の仕組みに反映されていくこと。つまりは、多様な意見に耳を傾けているかという民主主義への姿勢が問われる。だから、ジェンダー平等が進んでいるかは、その国や組織の民主主義の“成熟度”の指標とみなせる、そう考えたからである。

もちろんいうまでもなくジェンダー平等の実現はそんな“単純”ではない。誹謗中傷が怖くて声をあげづらい言論空間(特にネットでは誰にも相談できずに孤立し、自らを追い詰めてしまいかねない)、共感してくれそうなリーダーがみつきづらい政治・経済界の女性の参画の低さ、他の生き方の可能性を気づかせてくれるはずのロールモデルの不在、金銭的な負担、「男のくせに」「女のくせに」という周囲の反発。課題は山積している。

一方で、いかにそれらを乗り越えるかは、私が学んだ21世紀社会デザイン研究科で追求してきたことでもある。恩師でもあり、同研究科を創設した北山晴一名誉教授は、ジェンダーフォーラム第2代所長であった。フォーラム設立20周年記念のGemVol.40(2019年)に教授は以下の寄稿をされている。

ジェンダーフォーラムを設置した当時、立教大学は、おそらくジェンダー研究と活動における先駆的な大学のひとつであったと思われる。しかしながら、あれから20年経ったいま、肝心の大学内でのジェンダー環境はどれほど改善されたであろうか。ジェンダーに限らず、

### 立教大学コミュニティ系サークル

## 「Rikkyo Pride」の活動について

立教大学の学生のなかで、LGBTQ+当事者やアライの方、ジェンダー問題に関心のある方にとって、ありのままの自分でいられる居場所がないのではないか。こうした問題意識から、「Rikkyo Pride」は2022年度から未公認団体として再始動した。そして、2023年度には現役メンバーで初となる新入生歓迎活動を行い、現在は40名を超える規模の団体となっている。私は2021年度から当団体のメンバーとなり、2023年度から運営メンバーの一人として活動している。今回は、当団体の活動内容と活動を通して考えたことを紹介したい。

### 1. 当団体の活動内容

当団体の活動内容は、(1)ランチ会、(2)放課後会、(3)おでかけの3つであり、メンバーはいつでも自由に参加することができる。活動にあたっては通称名を使用することができ、セクシュアリティを公表するかは任意である。なお、プライバシー保護の観点から、写真撮影は原則禁止している。以下、本年度に行った活動を中心として、それぞれについて紹介する。

#### (1)ランチ会(週1回程度)

お昼休みに大学内の小さい教室を借り、各自ランチを持ち寄ってフリートークを行っている。初めてでも参加しやすい雰囲気や、メンバー同士が自由に交流できる場となっている。

#### (2)放課後会(週1回程度)

本年度から①フリートークを行う「交流会」、②テーマトークを行う「ディスカッション会」、③日常生活で感じた違和感を共有する「もやもや会」の3つに分類して活動している。春学期の「ディスカッション会」では、「現行の婚姻制度が抱える問題」「トランスジェンダーと学生生活」などについて議論した。また、学内でジェンダーやセクシュアリティについて考える他団体とコラボレーションを行い、「ジェンダーと就職活動」について議論した。

#### (3)おでかけ(月1回程度)

本年度は4月に新宿御苑でのピクニックと東京レインボープライドへの参加を行ったほか、5月に浅草観光、7月に江の島観光を実施した。とくに東京レインボープライドは非常に人気が高く、約20名のメンバーが参加して、代々木公園内の展示やパレードを楽しんだ。

### 2. 活動を通して考えたこと

活動を通して、メンバーから「大学の友人との会話やサークル活動などでは、『性別二元論』や『異性愛』が前提とされることが多く、自分のセクシュアリティがバレないか不安になる」「大学のトイレは男女別がほとんどで、生活の基本的な場面で困難を感じる」「就活で性自認に合わせた服装や振る舞いをしたいが、採用に悪影響を及ぼさないか不安である」というリアルな声や寄せられた。こうした声から、昨今「多様性の尊重」が謳われているものの、それが法制度や個人の意識としては浸透していない現実があることを痛感させられた。

他方、「この団体で初めて自分のセクシュアリティを打ち明けられた」「もやもやしていたのが自分だけではないとわかって安心した」「日常生活で抱えていた困難について情報を共有できた」という声もあり、この団体がメンバーにとって居場所となっていると実感した。社会全体に「多様性の尊重」が浸透していく過渡期に、Rikkyo PrideがLGBTQ+当事者やアライの学生、ジェンダー問題に関心のある学生にとって同じような悩みや問題意識をもつ仲間と出会い、ありのままの自分でいられる居場所となるよう、引き続き運営していきたい。

うりばー (Rikkyo Pride運営メンバー/本学学生)

社会的な弱者や少数者を排除する文化への批判的な立場は強化されているだろうか。昨今の社会的状況を見るならば「言うは易く行うは難し」であるが、であればこそ、ジェンダーフォーラムの役割はますます重要である。さらなる議論の深化に期待したい。

正直な話、立教で学んでいる間、私はジェンダーに深く触れていなかった。修了後に入職した国立女性教育会館で本格的に関わり、先日の広島G7サミットでは、公式エンゲージメントグループの1つWomen 7(W7)のアドバイザーとして参加するまでになった。グローバルサウスを含めた世界中のアクティビストと議論し、G7に対する女性たちの要求をまとめたコミュニケの作成に携わったが、こうした女性運動の活動に参加するたびに、ジェンダーの課題は根深いと痛感する。

けれども私は、立教での学びを経てジェンダーの重要性に目覚め、ジェンダーを考えることは人権と民主主義を考えることと確信した。W7を経たタイミングで母校に戻ったのも何かの縁と受けとめている。奇しくも、北山教授の研究室はいま私がこの文章を書いている事務局の真上にあった。多くの思い出がある6号館で、立教と縁のある方々と議論できるのを非常に楽しみにしている。

佐野敦子(ジェンダーフォーラム教育研究嘱託/本学大学院21世紀社会デザイン研究科修了生)

